

可愛い不動産営業のお姉さんが車で  
カエルを轢くところを見せつけられ、  
足の匂いも嗅がされた



## 第一章：カエルを轢いたお姉さん

「高橋くん、急で悪いけど、再来月から埼玉支店に行ってもらうことになった。」

「へ……？」

上司から唐突に告げられたその一言に、高橋直哉（たかはしなおや）（23）は一瞬耳を疑った。

直哉は大学卒業後、新卒で今の中堅食品メーカーに入社し今年で2年目。

ようやく会社にも馴染みはじめてこれからという時だった。

しかしまだまだ新人。上司に楯突きたい気持ちをグッと堪えた。

「……はい、分かりました。」

新しい配属先の埼玉支店は県を跨ぐとはいえ、今の家からでも通えない距離ではない。

しかし電車を乗り継いで毎日往復することを考えると、体力的にも精神的にも厳しい。

その日、帰宅した直哉は迷った末、引っ越しを決意した——。

\* \*

翌週末。

ネットで目星をつけて内見の予約を入れておいた物件を見に行くことに。

指定された時間、電車に乗り、予約した小さな不動産会社に足を運ぶ。

ドアを開けると、すぐに女性スタッフが笑顔で立ち上がった。

「高橋直哉さまですね。本日はご案内いたします、村瀬と申します。」



すらりとした姿勢。柔らかな笑み。白いブラウスと膝上のタイトスカート。

直哉は思わず一瞬、見惚れてしまった。  
彼女の年齢は自分と同じか少し上位だろうか。

明るそうな雰囲気と、どこか人を安心させる声。

その足元には、いくぶん履きこまれた黒のプレーンパンプス。

（結構可愛いな……）

担当営業の**村瀬美香（26）**に自然と直哉の目は吸い寄せられた。

「それでは、こちらへどうぞ。」



案内されたのは白い軽自動車。

社用車らしいが、車内は清潔で、ほのかに女性らしい香りが漂う。

助手席に腰を下ろすと、美香が運転席でシートベルトを締め、軽く笑った。

「少し田舎の方なので、舗装されていない道も通るので少し酔いやすいかもしれませんが大丈夫ですか？」

「はい、全然大丈夫です。」

他愛もない世間話をしながらしばらく走り、街を抜けると、景色は緑に包まれていく。

田んぼが広がり、遠くで蛙の声が響く。

細い畦道に差し掛かると、視界に小さな影が動いた。

それは、ぽつぽつと道路上に点在する小さなアマガエルだった。

「この道、この時期はよくカエルが出るんですよね。田んぼに住んでみたいで。」

美香が何気なく言った。

「へえ～そうなんですね……」

直哉は相槌しながらも、心の奥で嫌な予感がし

た。

（このままじゃ、轢いてしまう——）

そう思った次の瞬間——

プチッ！……プチプチッ！……。

車のタイヤがカエルを轢き潰す音が車内に響く。

「…………っ！！」

美香の運転する軽自動車が、道路上のカエルの小さな命を次々と潰していく。

ハンドルを握る美香は涼しい顔のまま、何事もなかったように会話を続ける。

「この時期は本当に多くて困ります。車が汚れちゃって……。」

(汚れ…?)

彼女にとって、轢き潰したカエルの命はただの汚れと同じ扱いらしい。

罪悪感など微塵もない声色に、直哉の胸の奥で何かが熱を帯びた。

プチッ、プチッ——

無数の小さな命を平然と轢き潰しながら進む車。

助手席で直哉は、心の奥で湧き上がる自分の異常な感情に、胸の鼓動が早鐘を打つのを抑えられなかった。

（残酷で可哀想なはずのに……なんでだろう……めちゃくちゃ興奮する……。）

（もっと見たい——  
彼女が、涼しい顔でカエルを轢き潰す瞬間を…  
…。）

助手席から、そっと彼女の横顔を盗み見る。

柔らかな頬のライン、長いまつ毛。まっすぐ前を見つめる綺麗な瞳。

——美人で、しかも可愛らしい。

（この女性が運転している車が、今…カエルを轢いたんだ。）

胸がざわつく。

背筋の奥からゾクゾクとした熱が這い上がり、理性が揺さぶられる。



プチッ、プチッ——。

一定の間隔で響く命が潰れる音。

それは、タイヤが路上のカエルを潰すたびに鳴り、まるで最後の存在証明のように車内にわずかに伝わってくる。

運転席の美香は、あいかわらず涼しい顔でハンドルを切り続けている。

(なんなんだこのギャップ……やばい……)

ふと、視線が自然と足元へと吸い寄せられた。運転席のペダルを踏み込む彼女の足。

膝下から伸びる脚は、すらりとした形の良さが際立っている。

パンプスは手入れこそ行き届いているが、革が柔らかく馴染んでおり、履き込まれているのが一目で分かる。

そのパンプス足が、アクセルを滑らかに踏み込み、カエルを潰しながら車を進ませていく。

本人は涼しい顔のまま、罪悪感など微塵も感じていないような表情で――。

（この綺麗な足で、今まさに命を潰している――）

その事実、胸の鼓動が激しく跳ねる。

彼女の足がペダルを踏むたびに、カエルたちが容赦なく押し潰され、命が途絶える。

直哉は、自分がこの状況にたまらなく興奮してしまっていることを必死に隠そうとする。

(やばい……抑えないと……——)

しばらく車は畦道を走り続け、視界の緑が途切れ、住宅街が見え始めた。

整備された住宅地に差し掛かると、美香が軽くウインカーを出し、静かに車を停めた。

「着きましたよ～。」

明るい声に現実へ引き戻される。

直哉はまだ胸の奥が火照ったまま、息を整えながらシートベルトを外した。

ドアを開け、外の空気を吸い込む。  
——それでも心臓の高鳴りは収まらなかった。

車を降りると、ふと視線が車体へと向かう。

目に入ったのは、車のタイヤ。

フェンダーを覗き込むと、撥ね上げられ、潰れて形を失った小さなカエルの残骸が、泥と共にぺったりと張り付いていた。

(……本当に、村瀬さんがこれを……)

再び鼓動が早くなる。

さっきまで彼女が何気なく運転していた、その車で潰された命。

ゾクリと背筋を走る快感。  
可愛い顔で無自覚に命を奪う、そのギャップが直哉を狂わせる。

「では、こちらです。すぐ近くなので。」

美香はカエルのことなど一切気にしていない様子で、パンプスのヒールを軽く鳴らしながら歩き出す。

まるで何もなかったかのように、明るい声で説明を始める彼女。

その自然体な仕草が、直哉にはますます刺激的に映った。

（この人は、さっき何十匹もカエルを轢き潰したばかりなのに……）

平然を装いながら、直哉はその後ろ姿を追い、物件へと向かう。

美香の後ろを数歩下がってついていく。

パンプスがアスファルトを踏む音が、静かな住宅街に小さく響く。

コツ、コツ…

その音のたびに、直哉の頭にはさっきの畦道の情景が蘇る。

（この可憐な足でアクセルを踏んで…無数のカエルを…）

住宅地の一角、少し古めだが綺麗に手入れされた二階建てのアパートに到着した。

美香は慣れた手つきで玄関の鍵を開ける。

「どうぞ、遠慮なく色々見てくださいね。」

彼女がそう言って先に中へ入る。

コツ…コツ…

玄関でパンプスを脱ぐ仕草が、やけにスローモーションに見えた。

細い足首が露わになる。

彼女の足を包んでいたパンプスが外れた瞬間、柔らかな曲線の薄いベージュストッキング越しの足が顔を出し、スリッパへと滑り込む。

その足元からは、淫靡な女の匂いが漂ってきそうで、直哉は思わず喉を鳴らした。

「築年数は古いですが、内装はリフォーム済みで、とても綺麗なんです。」



美香はスリッパに履き替えると軽やかに歩き、各部屋を案内する。

直哉は説明を聞きながらも、意識は完全に彼女の足に向かっていった。

さっきまであんな残虐行為を行っていたとはとても思えない可憐で可愛らしい女性。

今、その彼女の足が床を踏みしめ、木が軋む音が静かに響いている。

階段を上がる時、ふと視線が彼女の足裏に吸い寄せられた。

スリッパの中で、指が柔らかく曲がる。

足裏には、先ほどまでパンプス内で蒸らされていたのが分かる汗の跡がうっすらと湿っているのが分かった。

(やばい……エロすぎる……)

直哉は喉が渇き、呼吸を抑えるのに必死だった。

「だいたいこんな感じですかね〜。」

ひと通り案内が終わり、再び玄関へ。

美香は自然な流れでスリッパを脱ぎ、再びパンプスへ足を入れた。

履き慣れた革が彼女の足に吸い付くように馴

染む。

そして涼しい顔のまま微笑む。

「いかがでしたか？気に入っていただけるといいんですけど。」

「そうですね、なかなか良かったと思います。」

「良かったです！じゃあ高橋さんの候補リストに追加しておきますね。」

返事をしながら、直哉の頭の中は別の事でいっぱいだった。

(帰りもあの道通るのかな……。)

その期待だけで、直哉の胸は再び熱くなっていた。

助手席の直哉は妄想でカチカチに膨らんだ股間をバレないように鞆で抑える。

美香は気付く様子もなく、軽快にハンドルを切り車を発進させる。

帰り道、ほんの 1 時間ほど前に通ったあの畦道へ再び差し掛かる。

初夏の和かな日差しが路面を照らし、潰れたカエルの残骸がまだあちこちに残っているのが見えた。

目を凝らすと、そのいくつかは潰れたばかりのようにまだ生々しく、潰れた肉と飛び散った中身が滲んで光っていた。

（あれ…多分さっき村瀬さんが轢いたカエルだ…。）

胸の奥でゾクリと何かが震える。

この無惨な光景を作り上げたのは、横で微笑みながら運転するこの可愛い女性。

その事実が直哉の理性をじわじわと侵食していく。

プチッ、プチッ——。

再び響く、タイヤがカエルを潰す音。  
美香は世間話を続ける。

「この辺り、自然は多いですけど、虫とかカエルも多いから最初は驚きますよね〜。」

そう言って、何事もないように前を見据えたまま、次々とカエルを潰していく。

（やばい…これ以上、こんな光景を見せつけられたら——）

視界の端で、彼女のパンプスがアクセルを踏むたび、直哉の体は熱くなっていく。

無邪気な声と残酷な行為のギャップが、頭を狂わせる。

必死に興奮を抑え、平静を装いながら窓の外を眺め続ける直哉。

ようやく畦道を抜け、街へと戻った時には、心臓が痛いほど脈打っていた。

事務所へ戻ると、美香は明るい声で「お疲れさまでした」と微笑む。

直哉は力なく頷き、次に案内された近隣の他候補物件の説明をぼんやりと聞いて、本日の内見が終わった。

説明の最中も直哉の頭の中では、ひたすらさっきの光景が何度もリフレインしていた。

\* \*

事務所を出ると先ほどよりも太陽が傾き、徐々に日が落ち始めていた。

しかし直哉の胸の中は、それどころではなかった。

鼓動はまだ早く、頭の奥が熱を帯びている。

（あの可愛い村瀬さんが……あんな自然に、カエルを轢き潰して……）

思い返すだけで、呼吸が荒くなる。



美しい横顔。

涼しい顔でハンドルを握る手。

そして——あの綺麗な脚でアクセルを踏み込み、次々と命を踏み潰していった光景。

ドクン、ドクン……

胸の奥で高鳴る音が止まらない。

その熱は下半身へも伝わり、股間は明らかに硬くなっていた。

人目を避けるように、無意識に歩く速度が速くなる。

（見たい……あの潰されたカエルを……しっかりこの目で確かめたい……）

理性では止められなかった。

衝動に突き動かされるまま、直哉は先ほど通った道を逆方向へ歩き出す。

街の騒がしさが遠ざかり、空気が湿った田舎道へと変わっていく。

辺りは静寂に包まれ、虫の声だけが響いていた。

やがて、昼間通ったあの畦道が見えてきた。

夕方の薄暗さの中、路面には黒く潰れた小さな影が点々と残っている。

近づくと、それが潰されたカエルだとすぐに分かった。

無残に轢き潰され、ぺちゃんこになった胴体からは中身を飛び散らせ、肉も弾けて地面に張り付いている。

(これ……やばい……)

直哉は足を止め、その場にしゃがみ込んだ。  
鼻を近づけると、生臭さが漂う。

(これが……村瀬さんに潰されたカエルか…  
…)

——今日見た光景を思い出す。

涼しい顔でペダルを踏み込むパンプスの爪先。

その下でプチプチ音を立てて潰されていく小

さな命。

そして、何事もなかったように笑っていた彼女の顔。

(その結果がこれ……)

直哉の胸は高鳴り、呼吸が荒くなる。  
興奮はもう抑えられなかった。

夕暮れが夜に変わり始め、畦道には街灯もなく、  
薄暗さが一層濃くなっていた。

直哉はスマホのライトを照らし、ゆっくりと歩きながら点々と続く黒い影——潰れたカエルの跡を一つひとつ辿っていく。

膝を曲げ、近くまで顔を寄せる。  
泥と混ざった体液が光り、皮膚片が張り付いた  
路面。

あるものは完全に形を失い、あるものはまだ四  
肢の輪郭が残り、潰れた腹から中身が流れ出て  
いる。

どれもこれも、無惨に破壊された命だった。

（これ全部……村瀬さんが作った光景だ……。）

視界が霞み、胸がざわつく。  
美香の顔が脳裏に浮かぶ。

澄ました声で「この時期はいつもこうなんです  
よね～」と笑いながら、何も感じず車を進めて

いた彼女。

アクセルを踏み込む細い足首、パンプスの爪先。  
その全てが、直哉を狂わせるほど鮮明によみが  
える。

プチッ…プチッ…

頭の中であの音が何度もリフレインする。

タイヤに潰された音の一つひとつが、今日の前  
に広がっているこの残酷な光景だと思うと体  
が震える。

直哉は完全に彼女の虜になっていた。

理性ではどうにもならないほど、心も体も支配

されている。

彼女があは無邪気な声で笑いながら、次々と命を潰していく姿が——もう頭から離れない。

（もっと……もっと村瀬さんがカエルを轢くところを見たい……。）

暗い畦道の真ん中で、直哉は立ち尽くしたまま、興奮で震える体を抑えきれなかった。

彼の中で、村瀬美香への執着は、静かに、しかし確実に膨れ上がっていった——。

\* \*

帰宅した直哉は、部屋の明かりをつける間もなく、ドアを閉めたまま壁にもたれかかった。

心臓の音が、まだ早鐘のように響いている。  
体が火照って仕方がなかった。

脳裏を何度もループする——あの畦道での光景。

「……俺、こんな事で興奮して……最低だ……」

どう考えても異常。  
可哀想、残酷だと思う気持ちももちろんある。

しかし、理性とは別の本能が止まらない。



止められなかった。

直哉はベッドに倒れ込み、顔を手で覆う。

思い出すたびに、股間は熱を持ち、理性が崩れていく。

もう何も考えられなかった。

シーツを握りしめ、奥歯を噛みしめながら、彼はひとり、溢れる興奮に身を委ねた。

プチプチとカエルを潰す音、可愛らしい横顔、アクセルを踏むその足——  
すべてが、たまらなかった。

(……ああ…村瀬さん……っ！！)

やがて全身が痙攣するような快感に包まれながら、勢いよく白濁した精液を飛び散らせた。

直哉は、完全に落ちていた。  
村瀬美香という一人の女性の足元に——。

## 第二章：再びの畦道

翌週の午後、不動産会社から連絡が入った。

「もう一件、条件にぴったりの物件が見つかりました」と。

担当はもちろん、村瀬美香。

受話器越しの明るい声を聞くだけで、直哉の胸は高鳴った。

——物件の条件は正直それほど惹かれるものではなかったが、頭の中は別の期待でいっぱいだった。

もう一度、あの光景を見れるかもしれない。

彼女の運転。

あのアクセルを踏む可憐な足。

そして——無慈悲に潰される、小さな命。

直哉は不健全な期待を胸に電話を切った。

\* \*

週末の約束の時間、美香が待つ不動産屋の前。

扉を開けると、軽やかなパンプスの音と共に、  
笑顔の彼女が出迎えた。

「高橋さん、お待ちしてました～」

前回と同じような服装だが、今日の彼女は一段と輝いて見えた。

(やっぱり…かわいい……)

今改めて見ても彼女は“かなり”可愛い。

整った顔に明るい雰囲気、それでいてどこか抜けてるような感じのあどけなさ。

その全てが、直哉のフェチ心をくすぐる。

「じゃあ、早速行きましょうか～」

美香の声に促され、再び社用車の助手席へ。

前回と同じ車。

ドアを閉めると、微かに前回と同じ香りが鼻をかすめる。

どこか甘く、落ち着く匂い。

そして何より——彼女の足元。  
細く伸びた脚と、彼女の足に合った黒のパンプス。

その爪先が、またあのアクセルを……と考えた瞬間、鼓動が跳ねた。

エンジンがかかる。

ギアがDに入り、車がゆっくりと動き出す。

行き先はもちろん内見先の物件。

だが、直哉の期待は別の場所に向かっていた。

また、あの畦道を通ってくれるだろうか——。

「今日の物件、前に見たところのすぐ近くなんですよ〜」

美香は何気ない声でそう言いながら、ハンドルを軽やかに操る。

直哉はその声に頷きつつ、心の奥では別のことを意識していた。

（前に見た物件の近くってことは……途中まで、同じ道……）

その想像だけで、胸がざわつき始める。  
車窓に映る景色が徐々に変わっていく。

住宅街の家並みが途切れ、空が広くなり、左右には田んぼが広がる。

——そして。

あの畦道が、目の前に現れた。

舗装が甘く、両脇に泥が滲む細道。

路面には、前回と同じようにポツポツと、小さな影が点在していた。



跳ねるものもいれば、じっと動かずにうずくまっているものも。

何も知らずにそこに居るアマガエル達——。

（また……来た。）

直哉の鼓動が急に速まる。

手のひらに汗が滲み、呼吸が浅くなる。

だが、美香は何の躊躇もなく、速度を落とすことなくそのまま畦道へ入っていった。

口元には微笑を浮かべたまま、変わらぬ調子で会話を続ける。

「でもこの辺、やっぱりカエル多いですね〜。

ホント、車汚れちゃうんですね、下の方とか。」

その声が合図のように響いた次の瞬間——

プチッ…プチュッ…プチッ…！

前輪、後輪、助手席側、運転席側——

あらゆるタイヤが、無数のカエルを次々と轢き潰していく。

タイヤの下で弾けた体が、アスファルトに滲み、音が車内に微かに響く。

直哉の体が一気に熱くなる。  
皮膚の内側から沸き上がるような熱。

血液が股間に集中していく。

ズボンの下で、どうしようもないほどに硬くなっていく感触。

(やばい……やばいやばいやばい……)

美香は気にする様子もなく、可憐な足でアクセルを軽やかに踏み込み、次々と命を潰していく。

そのパンプスの先端が、直哉の視界の端で微かに上下するたびに――

プチッ……プチュッ……

罪のない命が、彼女の足の一踏みで音を立てて

潰れる。

(こんな……こんな光景見せられたら、もう…  
…)

理性が吹き飛びそうだった。

興奮はピークに達し、下腹部に走る圧倒的な熱  
と疼き。

息を殺し、顔をそらし、ただひたすら平静を装  
おうとする。

だが、指先が微かに震えていた。

(落ち着け……落ち着け……)

直哉は、内側から突き上げてくる興奮を、必死に理性で押さえつけていた。

それでも、膝は震え、汗ばんだ掌が太ももに貼り付く。

車内の温度は上がっていないはずなのに、体の芯が熱い。

ふと前方に目を向けた、その瞬間だった。

遠くに、一匹だけ異様な存在感を放つ影。  
田んぼから這い出したばかりらしい――

大きなウシガエルが、畦道の少し右寄りに陣取っていた。

明らかに他の小さなアマガエルたちとは違う。  
大人の拳ほどはあろうかという、堂々とした巨  
体。

（まさか……流石に、あれは避けるよな……？）

心臓が跳ねる。

だが隣を見ると、美香の顔には微笑みすら浮か  
んでいた。

変わらぬスピード。

アクセルを踏み込む足に、戸惑いや迷いは一切  
なかった。

(ウソだろ……？)

タイヤが迫る。

ウシガエルは動かない。

直哉の視界の中で、その巨体がゆっくりと運転席側のタイヤの進路に収まっていく。

逃げない。

避けない。

美香も……止まらない。

パンッ！

グチャッ……！！

耳を突き抜けるような、重く濁った破裂音。

直哉は思わず息を呑んだ。

今までの「プチ」という軽い音ではない。

破裂音に似た肉の弾ける音と、車体を伝う生々しい振動。

前輪がウシガエルを潰し、そして——直後、後輪で再びそれを押し潰した。

ベチャアッ……

ぬめった液体をタイヤが塗り広げるような感触が、車内の床下から僅かに伝わる。

(ヤバい……ヤバいヤバいヤバい……！！)

車のバックミラーに目をやる。



完全に体を潰され、中身を飛び散らせたウシガエルの死骸がアスファルトに横たわっているのが見えた。

その流れでふと、隣を見る。  
美香は変わらず、穏やかな顔でハンドルを握っていた。

さっきと同じ笑顔。何も感じていない、優しい表情。

そして——その可憐な足が、変わらずアクセルペダルの上に静かに乗せられていた。

(もう無理だ……今すぐにでも出したい……)

直哉の理性は、完全に限界に達しようとしてい

た。

体中の血が沸き立つような熱に包まれ、理性の最後の糸が軋む。

直哉はもう、黙って耐えることができなかった。

意を決して、隣の美香に声をかける。

「……あの、今……結構大きいカエル、轢きましたよね……？」

言った瞬間、自分の声が少し震えていたのが分かった。

動揺を隠せない。いや、隠す余裕すらもうなかった。

けれど、返ってきたのは――

「え？あ～、ですよ～、あれ多分ウシガエルかなあ。」

美香は全く悪びれた様子もなく、明るい口調で続けた。

「この時期は毎年この道通ると、どうしても轢いちゃうんですよ～。

数が多すぎて避けきれないし……最近はもう、あんまり気にしなくなっちゃいました。」

その言葉が、可愛い声で、無邪気に、あまりにも軽く放たれた。

ついさっき耳を貫いた、パン！グチャッ！という破裂音。

タイヤの下で弾けるウシガエルの肉片と、彼女の笑顔が、完全に重なった。

（気にしなくなった……？この人は、あんな大きな命を潰しておいて、笑ってる……）

直哉の頭の中で、何かがひび割れるような音がした。

思考がまとまらず、口の中がカラカラに乾いていく。

「そ、そうなんですね……」

それだけが、ようやく絞り出せた言葉だった。  
鼓動はもう、痛いほどだった。

隣には、何もなかったようにアクセルを踏み続ける美香。

可憐で、優しそうなのに——無自覚に、残酷だった。

直哉は視線を前に戻し、窓の外を見た。  
でも、もう何も入ってこなかった。

脳内には、ウシガエルの破裂音と、美香の声が、  
延々と反響し続けていた。

畦道を抜けて数分、再び住宅街に入り、車は目的の物件前に滑り込むように停まった。

「着きましたよ〜。」

エンジンが止まり、美香が笑顔でドアを開ける。

直哉も続いて外へ出るが、彼女が玄関の鍵を開けるために先に歩いていったその瞬間――

彼は、吸い寄せられるように車の側面へと目を向けた。

そこには、あまりにも現実的な“結果”が残されていた。

前輪の溝、フェンダーの裏。  
後輪の泥除けの縁。

そして助手席側のステップ部分にすら……。

乾きかけた泥と混ざり合った赤黒い液体の飛沫。

撥ね上げられた千切れた足。

潰れた皮膚や体液が貼り付き、形を失った破片が、そこにあった。

(……ああ……これが……)

鼓動がまた、早くなる。

耳に焼きついた音が、再び鮮明に蘇る。

そして、目の前にあるのは——まさにその“結果”。

何の躊躇もなく、可憐な足でアクセルを踏み、何の感情も込めずに作り上げられた残酷な景色。

それが、今ここに残っている。

「高橋さ～ん、入りますよ～。」

美香の明るい声に、我に返る。

慌てて顔を上げると、彼女はすでに玄関のドアを開けて、こちらを振り返っていた。

直哉は、まだ熱の残る胸を抱えたまま、ゆっくりと彼女の後を追った。

(……この人の足が、これを作った……)



その思考が、頭の中で何度も繰り返されていた。

「どうぞ～」

美香が明るい声でそう言いながら、玄関の段差にかかとをかけてパンプスを脱ぎ始めた。

直哉はその後ろに立ちながら、彼女の足元から目が離せなかった。

ストッキング越しでも分かる、スラッとした形の良い脚。

その足首がクイッと軽く捻られ、履き慣れた感のある黒のプレーンパンプスがするりと脱がれていく。

たったそれだけの仕草なのに、妙にエロティックに感じてしまう。

肌と靴の間のわずかな隙間、ストッキングの薄布が擦れる音まで聞こえそうで、直哉はごくりと唾を飲み込んだ。

そして、美香が室内のスリッパに足を入れて歩き出すその瞬間、直哉の視線は残されたパンプスの中に吸い寄せられた。

明るいベージュ色の中敷き。

かかとのロゴマークが書かれた布は黒く汚れ、文字も擦れている。

さらにつま先のあたり――

そこには、明らかに汗で黒ずんだ痕跡が浮かん

でいた。

特につま先の内側。指が密着する部分に沿って、凹み、くっきりと足指型の汚れが染みついている。

それがまるで、「この靴は何度も何度も、この足で踏みしめられてきた」という証そのものだった。

（ヤバい……これが……あの足が……）

あの可憐な足で、アクセルを踏み、カエルを轢いた女性に履かれていたパンプス。

その“日常”の痕跡が、靴の中に濃密に染み込んでいた。

汗、汚れ、圧——

どれも彼女の足が生み出したものだと思うと、全身に鳥肌が立つような快感が走る。

鼻先に漂ってきそうな、蒸れた革と足汗の混じった匂い。

実際には嗅いでいないのに、錯覚するほど濃密な想像が頭を支配していた。

（これが村瀬さんがいつも仕事で履いてるパンプスの中……）

直哉の中の理性は、ギシギシと崩れかけていた。

「どうぞ～、リビングからご案内しますね」

美香が軽い足音を立てながら、スリッパ姿で廊下を進んでいく。

直哉は彼女の後ろ姿を見つめながら、息を殺すようにしてその場を動けずにいた。

「じゃあ、どうぞ～。お上がりください。」

美香に促されるまま、直哉はスリッパを履き、物件の中へと足を踏み入れた。

だが、その足取りはふわふわと宙に浮いているような感覚で、現実感がまるでなかった。

「ここがリビングで～、奥がキッチンですね。前のより少し広めかな？」

美香はいつも通り明るく説明をしてくれている。

けれど、その声も言葉も、直哉の頭にはほとんど入ってこなかった。

今、彼の意識はただ一つ——玄関に置かれた、あのパンプスに全てを支配されていた。

彼女のスリッパの足元。

つま先がふわりと持ち上がり、踵がゆっくりと沈むたびに、あのストッキング越しの足裏が想像の中で露わになっていく。

スリッパからちらりと見える素足のライン。

その足裏から発せられた匂いや汗をしみ込ま

されているであろう靴が、玄関にある――。

（あのパンプスの中……絶対、蒸れて匂いがこもってる……）

鼻の奥が熱くなり、喉が乾く。

視線は必死に逸らしているつもりでも、何度もスリッパを履いた彼女の足に引き戻されてしまう。

口元は乾き、頭の中ではすでに、あの靴の中に顔を突っ込んで匂いを嗅いでいる自分の姿がリアルに描かれていた。

（嗅ぎたい……あの靴の匂い……どうしても……）

あの靴のつま先部分、黒ずんだベージュの中敷。  
指の跡。踏み込んだ痕。汗の染み。

たった今この部屋を歩いている彼女の足が、直  
前までそこに入っていた。

直哉の理性は、とうとう崩れ始めていた。

もう、「見たい」「嗅ぎたい」「知りたい」という  
欲望の言葉しか、頭の中にはなかった。

彼は、美香の言葉に軽く頷きながら、  
その背中の向こうで、自分の中の最後の一線が  
音を立てて切れていくのを感じていた。

「えーっと、ここを押せばいいはずなんだけど



……おかしいなあ……」

バスルームの給湯器の前で、美香が首をかしげる。

操作パネルを何度か軽くタッチしながら、小さく唸るような声が漏れた。

「ちょっと待ってくださいね、マニュアル確認しますね～」

そう言って彼女は、脱衣所の棚に置かれた説明書を手に取る。

視線はマニュアルに釘付け。

ページをめくりながら「えーと、これがあれで……」と、ぼやくように読み上げている。

今しかない。

直哉の頭の中で、瞬時にスイッチが入った。  
自然な声色を作りながら口を開く。

「ちょっと設定確認してもらってる間に、キッチンもう一回見てきますね～」

「はい～、どうぞ～」

マニュアルに夢中な美香の返事が、軽く返ってくる。

足取りは素早く、だが音を立てないように。  
廊下を抜け、玄関に向かう。

すぐ向こうには、あの靴がある。  
はやる気持ちを抑え、足早に玄関に向かう。

そして――

玄関前。

奥の脱衣所からはマニュアルを読み込む美香  
の声が聞こえる。

(今なら大丈夫……)

直哉は、脱ぎ揃えられたパンプスの前で、静かに膝をついた。

手に取ったのは右足のパンプス。

履きこまれた黒のプレーンパンプス。

まだ、脱がれて数分も経っていない。  
温度が残っている。湿度も——そのまま。

直哉はパンプスを両手で支えようと、息を止め、  
履き口に鼻を深く押し当てた。

鼻に感じる生温かい温度。

ゆっくりと鼻から息を吸う。

ふわり、と鼻腔を満たす蒸れた革の匂い。  
その奥から、すぐにそれはやってきた。

ツンとした、酸味のある匂い。

初夏の少し汗ばむ陽気の中、ストッキング足で長時間履かれていたのが分かる明らかな女の足の匂い——。

(……あぁ………)

だがそれは不快ではなかった。むしろ、身体の奥を熱くさせる刺激だった。

ストッキング越しにかいた足汗が染み込み、蒸された熱気と混ざり合い、濃縮された女の匂い。

鼻の奥でピリピリと痺れるような感覚。

たまらず、もう一度、深く——クン、クン……ッ

(うわ……これが……村瀬さんの足の匂い……)

直哉の股間が、一気に反応する。

ズボンの下で、抑えきれないほど硬く、突っ張る感覚。

パンプスの奥、つま先の足指の方へ鼻を近づけるほど、より匂いは強くなった。

遠く、脱衣所からはまだ美香の声が小さく聞こえる。

「えーと、この「追い焚き」ってボタンが……ん〜？」

その声がまた、たまらなかった。

あの可愛い声の持ち主が、この靴を履いた足で  
アクセルペダルを踏み、カエルを轢き潰し、今  
もその足で部屋を歩いている——

その足にずっと履かれていた靴から発せられて  
いるのがこの匂いだった。

直哉はその場で、理性の最後の糸が焼き切れる  
音を聞いた気がした。

(ダメだ……このままじゃ……)

パンプスを握る手が震える。  
もう一度深く嗅げば、確実に理性が吹き飛ぶ。

そんなギリギリのところで、直哉はなんとか踏

みとどまった。

パンプスをそっと元の位置に戻す。  
左右の位置と向きを微調整し、脱がれたままを  
装う。

そして音を立てぬよう、静かに、慎重に、玄関  
をあとにした。

脱衣所へ戻ると、美香が振り返り、笑顔で言っ  
た。

「あーっ！分かりましたよ、高橋さん。これ、  
ちょっと長押ししないとダメだったみたいで  
す～」



その可愛い声に、直哉は無理やり笑顔を作る。

「へ、へえ～……なるほど……」

だが内心では、彼女の靴の匂いがまだ鼻の奥に残り、頭が完全に浮ついていた。

その声すらも、あの蒸れた靴の中の匂いと繋がって感じられる。

彼女が目の前で無邪気に給湯器の説明をする姿すら、どこか異常にエロく見えた。

その後も、寝室、ベランダ、収納スペースと次々に案内されるが、直哉の耳にはほとんど内容が届いていなかった。

彼の頭の中では、ずっとこう繰り返されていた。

「あの靴で…あの足で…カエルを……」

あの匂い。あの汚れ。あのパンプスの中の温度  
——すべてが焼き付いて離れなかった。

やがて、内見がすべて終わり、外に出る。

「じゃあ事務所戻りましょうか～」

美香が鍵を手に、社用車へ向かおうとする。

だが直哉は、ふと立ち止まり、振り返った。

（もう一度、……村瀬さんに潰されたカエルを、もう一度間近で見たい）

そして、ふと自然を装って口を開いた。

「ちょっとこの辺、気になる店とかあるんで…  
…このまま置いていってもらって大丈夫です。」

「駅も近いし、少し寄って帰ろうかと。」

「あ、そうなんですね～。分かりました！」

美香は少し驚いたように目を瞬かせたが、すぐに笑顔に戻った。

「じゃあ気に入ったらまた連絡くださいね！  
私、この後近くの管理物件回ってから事務所戻りますので～」

手を軽く振りながら、彼女は車に乗り込む。  
そしてエンジンをかけ、軽やかに発進した。

静かな住宅街に、美香の車が遠ざかっていく音  
が残る。

直哉は、その場にひとり立ち尽くしながら——  
ゆっくりと振り返った。

もう一度、あの場所へ。  
もう一度、彼女の“残したもの”を見るために。

高鳴る鼓動を胸に、直哉は早足で畦道へと向か

っていた。

顔を上げれば、午後の陽射しがまだ強く照りつけている。

時間は、14時を少し過ぎた頃。

空は明るく、人の気配はほとんどない。  
だが、彼の体は密かに火照り、抑えようのない  
興奮が全身を駆け巡っていた。

(どうしても……直接見たい……)

鼻の奥には、さっき嗅いだパンプスの匂いがまだ残っていた。

湿った革の香り。ストッキング越しに染みた足汗の酸っぱい蒸れた匂い。

あの足が、タイヤを通して作り出した“結果”を——直哉は今から、目にする。

はやる気持ちを抑え、来た道をゆっくりと歩いていく。

歩き始めて十数分——畦道に入り、ところどころに、遠目にも黒く潰れた生々しい痕跡が点在しているのが見えはじめた。

それは確かに、さっき美香の車で通った道の上の跡。

目を凝らしながら、一步ずつ歩く。

そして――

「……あった……」

直哉の声にならない呟きが漏れる。

そこには、無数の潰されたアマガエルの残骸。

押し花のように、四肢を真横に広げてぺったんこになったもの。

脚が千切れ、道路上に転がっているもの。

腹部が破れ、中の臓腑がアスファルトに滲んでいるもの。

どれもまだ乾ききっておらず、光の加減で湿った赤と緑が鈍く反射していた。

すべてが、生々しい。  
ついさっき、彼女が車で通った道の光景。

この無惨で、汚く、残酷な風景は、紛れもなく

---

あの、村瀬美香という“可憐な女性”が作り出したもの。

直哉の中で、何かが弾けそうだった。

頭の中が真っ白になるほどの興奮。

呼吸が乱れ、喉が渇き、下半身には抑えきれない熱が広がっていた。



（あんな可愛い顔してるのに……何の罪悪感もなく……こんな残酷なことをして……）

（あの匂いのする足でアクセルを踏んで……このカエルたちを……）

その想像が、視界と完璧に重なった瞬間——意識が飛びそうになるほどの興奮が、全身を駆け巡った。

直哉は、もう抑えきれなかった。  
無意識のうちに膝を折り、その場にしゃがみ込む。

顔を近づけて、じっと見つめる。

皮膚が裂け、中身が押し潰された跡。

片脚は千切れ、胴体から少しだけ離れた場所に落ちていた。

それを、小さな蟻たちが列を成して運び始めている。

鼻にふわりと届く、生臭さ。

湿った泥と体液の混じった匂い。

腐りかけた蛋白質のような、鼻腔をくすぐる重たい臭気。

常人なら顔を背け、息を止めたくなるような刺激。

(なのに、なんで……こんなにも……)

直哉は、自分の中で抑えようとしていた最後の感情が、完全に溶けていくのを感じた。

目の前の死骸。それだけなら、ただ可哀想で終わる光景。

けれど、それを作ったのは他でもない——あの村瀬美香。

彼女の足が、アクセルを踏み、タイヤを回し、目の前の命を押し潰した。

(この残酷すぎる光景と、あの可憐な笑顔のギャップ……)

その“ねじれ”が、直哉の興奮を限界まで押し上

げていく。

心臓が痛いほどに打ち、呼吸は速く、ズボンの奥では、疼くような熱がさらに硬さを増していく。

蟻が群がる潰れた肉を前に、直哉は、自分の欲望が完全に目覚めてしまったことを悟った。

もう、戻れない。  
もう限界だった。

直哉の中で、理性という薄い膜は今にも破れようとしていた。

鼻には、さっき嗅いだばかりの美香のパンプス

の匂いがフラッシュバックする。

酸っぱくて、蒸れていて、隠し切れない仕事を頑張った女の足の匂い。

その匂いと、目の前の潰されたカエルたちの残骸が、頭の中で混ざり合っていた。

(……もうたまらない……)

抑えきれない衝動に突き動かされるまま、彼は再び歩き始めた。

(……あれも見たい……あのウシガエル……)

畦道の端。

細く長い舗装の継ぎ目を、視線を這わせるようにして歩く。

途中、何体ものアマガエルが潰れた跡が次々と現れる。

そのまま歩き続けること数分。

そこに、それはあった――。

直哉は、思わず息を呑んだ。  
無意識のうちに足が止まり、重力に引かれるように膝を折る。

路面の端。丁度車のタイヤが通る場所に、明らかに異質な潰れ跡。

ウシガエル。

大人の拳よりもはるかに大きな個体。

胴体は完全に潰れ、肋骨ごと裂け、中身が赤黒く飛び散っている。

頭部は潰れすぎて、もはや輪郭が分からない。

両足は体から離れて斜めに張り付くようにアスファルトに溶けていた。

まだ濡れた体液が、薄い膜を作って光を反射している。

(…うわ……これ……)

鼓動が跳ね上がる。

心臓が、体の中で爆発しそうだった。

“最近気にしなくなっちゃいました〜”と、あっさり笑って言っていたあの無邪気な声。

パンプスを履いた綺麗な足が、アクセルを踏み込んで――

目の前のこの残酷すぎる光景を、たった数秒で生み出した。

（この惨状を……村瀬さんが作った……）

その事実が頭に浮かんだ瞬間、全身が震えるような興奮に包まれた。

眩暈がするほどの倒錯。

鼻の奥に蘇る、あの靴の匂いと、この光景とが重なり合い、脳の奥で混ざる。



もう無理…この場を出したい…

そう思った瞬間――

ブウウウ……ツ……

静かな畦道に、後方からエンジン音が近づいてくる。

振り返ると小さな白い軽自動車。

道の奥から、こちらに向かってゆっくりと走ってくる車の姿が見える。

徐々に近づいてくる車。  
直哉の背筋に、汗が伝った。

(あれは……)

100メートルほど後方まで迫る車——  
畦道をゆっくりと進んでくるその車は、間違いなく、村瀬美香の乗る社用車だった。

(あ……)

思考が一瞬止まる。

直哉は反射的に何事もなかったように振る舞いながら、車に背を向けて道路脇へと静かに身を寄せた。

エンジン音が徐々に近づいてくる。

周囲に人の気配はない。

乾いたタイヤの摩擦音だけが静かな畦道に響いていた。

直哉は平静を装い、心臓が破裂しそうなほど高鳴りながら、車が通り過ぎるのを待つ。

そして、美香の車が——あと数メートルという距離まで迫ったその瞬間、彼は自然な動きで視線を下に落とした。

その目線の先にあるのは——

さっき自分がしゃがみ込んで観察していた、ウシガエルの潰れた死骸。

ぬらりとした赤黒い肉片。飛び散った体液。弾けた中身。

アスファルトにべったりと張り付いた両脚。

(……まさか……)

直哉の全身がビクンと震える。

その予感、見事に的中した。

グチャッ……クチャ……！

助手席側の前輪が、まさにウシガエルの死骸の真上を通過する。

直後、潰れた体の上をもう一度後輪が通り、粘着質な音を立てて潰し、タイヤにまとわりつくように撥ね上げた。

直哉の脳内が、真っ白に弾けた。

可愛い美香が運転するその車。  
無邪気に、何のためらいもなく、何も感じていない表情で。

あの可憐な足でアクセルを踏み込み——

ついさっき奪った命を弄ぶように再度轢き潰して通り過ぎていった。

（ヤバすぎる……！！）

身体の奥から、信じられないほどの興奮が込み上げてくる。

心臓は激しく脈打ち、股間は意識しなくても分かるほどカチカチに勃起していた。

ただ車で通り過ぎただけ。

それだけなのに、直哉にとっては、とんでもない  
快樂に等しい出来事だった。

視線を上げると、美香の車は遠ざかっていく。

（あの人は……やっぱり、何も感じてないんだ  
……）

その“無関心”が、直哉の性癖に刺さりすぎた。

どこまでも、どこまでも、堕ちていくしかない  
ほどに。

グチャ……クチャ……

ウシガエルの残骸を轢き潰す音を響かせなが

ら、美香の軽自動車は直哉の横を通り過ぎていった。

通り過ぎる車を見つめながら、直哉はただ呆然と立ち尽くしていた。

全身を貫く興奮。脈打つ鼓動。  
理性は、いまにも完全に壊れ落ちそうだった。

——しかし。

車は直哉の横を 20 メートルほど進んだところで、急に止まった。

軽いブレーキ音のあと、ドアが開く。

次の瞬間、聞き慣れた明るい声が畦道に響いた。

「やっぱり高橋さんだー！」

視線を向ければ、笑顔の美香が手を振りながらこちらへ歩いてきていた。

「なんでこんなところ歩いてるんですか～？  
もし良かったら乗っていきますか？ 駅まで送りますよ！」

それは、何も知らない笑顔。  
無邪気で、優しくて、そして——何より残酷な  
ほどに無自覚な声。

(ヤバい……ヤバいヤバい……)



心拍数が跳ね上がる。  
顔の筋肉が強張り、汗が背中を伝う。

だが、直哉は必死に、全身全霊で“平静”を装った。

「あ、いや……運動がてらちょっと歩きたいな  
と思って。ありがとうございます、大丈夫で  
す！」

自分でも驚くほど、自然な声が出た。

「そっか～、えらいですね～。じゃあ、また連絡  
しますねー！」

美香はニコッと微笑むと、再び車へ戻った。

ドアを閉める音、エンジンが軽く唸り——  
白い軽自動車は、静かに、何事もなかったかの  
ようにその場を後にした。

直哉はその場に立ち尽くしたまま、遠ざかる車  
の背中を見つめていた。

（俺……もう……絶対に、戻れない。）

直哉は、自分の心の奥に巣食ったフェチと倒錯  
の影に、完全に、抗えなくなっていた。

美香の車が見えなくなると同時に、直哉の体から力が抜けた。

膝が震え、無意識に足元へ視線を落とす。

——そこには、美香の車が再度轢き潰していったウシガエルの死骸。

もうほぼ原型は無く、さっき見た時よりもさらにぺったんこになっていた。

皮膚が裂け、肉が引き伸ばされ、アスファルトに張り付くように広がっている。

中心からは放射状に赤黒い液体が飛び散り、まるで地面に絵を描いたかのように生々しく染まっていた。

両脚は骨ごと潰され、すでに形を成していない。

その目を背けたくなるような残酷な光景が、直哉には——異常なほど淫靡に見えた。

震える手で口元を覆いながら、彼はしゃがみ込む。

呼吸が浅くなり、息が詰まるほどの興奮が喉元までせり上がる。

鼻腔をくすぐるのは、生温く湿った血と肉の臭い。

泥と混じった鉄の匂い、皮膚の生臭さ。

それが風に乗って、ゆっくりと直哉の脳に染み込んでいく。

そしてふと、目を凝らすと——  
潰れた肉片の間に、黒い粒のようなものがいくつも混じっていた。

よく見ると、それは……蟻やハエの死骸。

さっきまで肉をついばんでいた虫たちも、車輪に巻き込まれて一緒に潰されていたのだった。

虫の体液が潰れたカエルの粘液と混ざり合い、その一体化した肉塊が、ぬるりと地面に張り付き、ねちょねちょと糸を引いていた。

（こんな……残酷すぎる光景を……村瀬さんが……）

（涼しい顔で、タイヤで、パンプスの足で——…）

再び脳内でフラッシュバックする。  
アクセルを踏み込む美香の足。

カエルを何匹も、何十匹も、何度も轢き、今も

自分に無邪気に笑いかけてきた彼女。

可愛い顔、甘い声、手入れされた爪、そしてあの匂いのする靴——。

もう、限界だった。

指先が震え、理性が完全に崩壊する。  
興奮は臨界点を超え、視界が揺れ、意識が白く  
飛びそうになるほどの熱が、全身を突き上げた。

(……くっ！！……)

直哉は、その場で果てた。

アスファルトの上、潰れた命の隣で。

一人の可愛い女性によって、何気なく行われた残酷な行為の余韻の中で。

（もう、俺は——完全に堕ちてしまった……）

果てた直後、直哉はしばらくの間その場から動けなかった。

立ち上がったものの、下着の中に染みた生温かい熱と粘りが肌に触れ、体中が軽い痙攣のように震えていた。

見渡せばのどかな田んぼの風景。  
風に揺れる稲。遠くで鳴く虫の声。

そんな穏やかな景色の中で、自分は——完全に壊れてしまったのだと、どこかで自覚していた。

「……あんなの、見せられたら……我慢できないって……」

ぽつんと、口から零れた独り言。

誰に向けたわけでもないその言葉が、風に流されて消えていく。

足元には、まだ潰されたウシガエルの肉片がぬめりと光っていた。

「ふう……」

深いため息を吐き、背筋を伸ばす。

ほんの少しだけ、理性が戻ってくる。  
しかし、その奥には確かな“覚醒”があった。



「……帰るか。」

そう小さく呟き、直哉はゆっくりと歩き出した。

目の前には、美香の車が通った痕跡。

アスファルトに残された潰れたカエルの残骸が、まるで“道しるべ”のようにポツポツと続いている。

四肢を伸ばされぺしゃんこになったアマガエル。

体液が飛び散り、泥にまみれた影。

直哉は、それらを丁寧に踏まないよう避けながら――

美香が残した倒錯と支配の軌跡を辿るようにして、静かに駅へと向かった。

\* \*

帰宅後も、頭の中はずっと熱く火照っていた。シャワーを浴び、ベッドに倒れ込んでも、脳裏にはあの景色がこびりついて離れない。

潰されたウシガエル。

笑顔で「避けきれないですからね～」と言った美香の無邪気な声。

そして——玄関で嗅いだパンプスの中の、あの匂い。

直哉は、シーツに顔を押し付け、その全てを思い出しながら、また一人で果てた。

もう何度でも繰り返せる。

彼の中に植え付けられた興奮は、これからもずっと消えない。

こうして直哉は、完全に“彼女の無自覚の残酷さ”に支配された。

### 第三章：彼女に壊された理性

翌週。

いつものように昼休み、直哉のスマホが震えた。

通知に表示されたのは——\*\*「村瀬美香」\*\*の  
名前。

「あ、もしもし高橋さん？  
また一件、すごく良さそうな物件が見つかりま  
して。  
駅も近いし、条件的にも理想に近いと思うんで  
すよ〜。」

その声を聞いた瞬間、直哉の胸はじんわりと熱  
を帯びた。

送られてきた物件資料を見る限り、たしかに申し分ない。

間取り、家賃、立地……これまでのどの候補よりもバランスが良く、転勤先までのアクセスも抜群だった。

(……そろそろ、決めないと……)

転勤時期まで、あとわずか。

もう悠長に内見ばかりしている時間は残されていない。

現実的にも、今回が“最後のチャンス”だろう。

だが直哉の胸を締めつけたのは、そんな現実的な焦り以上に、別の感情だった。

(これが……もしかしたら、村瀬さんと回る

“最後の内見”になるかもしれない……)

そして、もしこの物件が本当に良ければ……  
契約を済ませた瞬間、美香との“関係”は、そこで終わる。

胸がズキリと痛んだ。

名残惜しさ。

もっと見ていたいという欲。

まだ堕ちきれていないとすら感じる、未完成な  
倒錯。

だが、最後だと分かっているからこそ——

「……悔いのないように、すべてを目に焼き付けよう」

そう、静かに決意した。

直哉はスマホを握りしめながら、  
最後の“内見”が、どんな景色を見せてくれるの  
かを思い描いていた。

\* \*

約束の日の午後。

直哉は不動産屋の前に立っていた。

これまで何度も足を運んだ場所。

だが今日が、“最後かもしれない”という事実が、  
胸の奥をじんと締めつけた。

扉を開けると、明るい声が飛び込んできた。

「高橋さん、お待ちしてました〜！」

カウンター越しに顔を出したのは、  
いつもと変わらぬ笑顔の美香。

白いブラウスに紺の膝丈タイトスカート。

足元は、見慣れた——あの黒のプレーンパンプス。

「今日の物件、ほんとうにおすすめなんですよ。

これで決まらなかったら逆に驚きかもです！」

無邪気に笑いながら鍵を手に取り、さっそうと



社用の軽自動車へと向かっていく。

直哉は、その後ろ姿を見ながら、  
どこか名残惜しい気持ちで、助手席に乗り込んだ。

「今日で最後かもな……」

心の中でそう呟きながら、車はゆっくりと走り出す。

車内には、前と同じほのかな甘い香りが漂う。

会話もいつも通り、仕事の話、物件の話、たわいない世間話。

でも、直哉にとっては一つ一つが“もう二度とないかもしれない時間”だった。

ふと、窓の外に目を向ける。

アスファルトには、水たまりがところどころ浮かび、路面全体が薄く濡れていた。

ほんの一時間ほど前まで、雨が降っていたせいだろう。

美香の濡れたパンプスの靴底が、アクセルペダルを軽やかに踏むたびに、靴底が少しだけ滑るように感じられた。

「わ、道路濡れてますね～。滑らないように気をつけないと。」

と、美香は軽く笑ってハンドルを握る。

その明るさが、直哉には残酷なほど美しく見えた。

そして――

車が田んぼのあるエリアへ差し掛かる。

視界に、見覚えのある畦道が見えた瞬間、直哉の呼吸が少しだけ浅くなった。

（来た……あの場所だ……）

緑に囲まれた一本道。

湿った空気。

そして――濡れたアスファルトに、ぽつぽつと見え始める黒い影。

直哉の中で、高まる期待と興奮が静かに沸き立

つ。

畦道に差し掛かるにつれ、直哉は思わず身を持ち出すようにして窓の外を見た。

そして、その光景に——目を見張った。

今までとは比べ物にならない数のカエルたち。

小さなアマガエルが、ぴょん、ぴょん、と濡れた路面をまるで占領するかのようには跳ねていた。

前方には、点ではなく“面”として認識できるほどの数のカエルが、一斉に道を横断し、座り込み、跳ね回っている。

湿ったアスファルトの上に、無数の命が無防備

に散らばっている。

直哉は、鼓動が跳ね上がるのを感じた。

(なんだこれ……今日……多すぎる……)

思わず口をついて出る。

「なんか……今日、カエル多いですね……」

運転席の美香は、軽く笑いながら答えた。

「雨上がりだとこうなるんですよ～。ほんと、嫌だなあ……」

あくまで嫌そうな口ぶりだけど、スピードを落とす素振りはない。

ハンドルをしっかりと握り、彼女はそのままのスピードで——

一切の躊躇なく、アクセルを踏み込んで無数の命の上へと突っ込んでいく。

……プチッ、バチン！クチャ！……プチッ！…  
…

最初の数匹が、タイヤの下で跳ね潰される。

濡れた路面に粘り気のある音が混じり始める。

前輪で潰し、後輪が肉を伸ばす——

カエルの体液がタイヤに巻きつき、水しぶきと混ざり、濁った雫として弾け飛ぶ。

その全てが、直哉の身体を貫いた。

前方に広がる“無数の命”と、その上を何も気にせず車を走らせる美香の横顔。

（これは……ヤバい……ヤバすぎる……）

早くも、下腹部が熱を帯びる。  
ズボンが持ち上がるほどの硬さになっている  
のを自覚する。

でも、もう抑えられなかった。  
この光景を前にして興奮しないわけがなかつ  
た。

直哉の股間は、今にも爆発しそうなほどに膨ら  
んでいた。

そしてその横で、何も知らず、笑顔でハンドルを握る美香。

彼女は今、前方の大量のカエルに対して——

「避けよう」とすらしていない。

連続して潰されていく音が、車内に微かに響き続ける。

プチッ、グチャッ、ベチャッ——

水を含んだカエルの肉が弾ける独特の破裂音。そのたびに、直哉の下腹部はピクピクと反応していた。

あまりの興奮に、口を開かずにはいられなかつ



た。

「……あの、村瀬さんって……カエルを轢くの、抵抗とかないんですか……？」

遠慮がちに、声を低く抑えて尋ねる。

心臓がバクバクと波打ち、口の中が異様に乾いていた。

こんな事聞いて良いのかという怖さと、彼女の反応が見たいという純粋な欲望がせめぎ合う。

美香は特に驚く様子もなく、少し笑って答えた。

「ん～……最初の頃はね？ ちょっとだけ“可哀想かも…”って思ったりしましたよ」

「でも最近は、もう慣れちゃいましたね～」

「だって、どうせ全部は避けきれないし？」

あっさりとした口調。

助手席側のタイヤが、再びグチャッ！と派手な音を立ててカエルを轢き潰した。

「所詮カエルだし、別にいいかなって。  
……なんか冷たいですかね、私（笑）」

(……あ……)

その言葉を聞いた瞬間、直哉の中で何かが完全に弾けた。

所詮カエル。  
慣れちゃった。  
どうせ避けきれない。

無邪気な声で、笑いながら放たれるその一言一言が、直哉の性癖を、深く深く突き刺してきた。

だが、美香の言葉は、それだけでは終わらなかった。

「……それに、ちょっと引かれるかもしれないですけど……」

「最近はむしろ——ちょっと癖になっちゃってるというか……」

「タイヤで潰すときの音とか……なんかクセ

になりませんか？プチッとか、グチャッて音が…  
…」

「うわ～私、ほんとヤバい人みたい（笑）」

（もう無理……）

直哉は、思わず目を閉じた。  
顔が熱い。鼓動が速すぎて、頭が回らない。

ズボンの下では、ガチガチに勃起した股間がズボンを突き上げ、ちょっとでも動けば、確実にバレてしまいそうなほど——限界ギリギリ。

（この人……完全に、俺の理想すぎる……）

（無自覚に……平気な顔して、残酷なことを楽

しんでる……)

助手席で、直哉はその場にいるだけで絶頂に達しそうなほどの興奮を味わっていた。

もう、隠しきれなかった。

ズボンの中で膨れ上がった直哉の股間は、明らかに常軌を逸していた。

ズボンの布地が突っ張り、わずかな動きでも擦れてしまう。

それを悟られまいと、直哉は震える手でカバンを不自然なほど膝上に置き、必死に押さえつける。

しかし――

パンッ！クチャ！！……

「うわ、今の……すごい音でしたね～。  
たぶんでっかいやつだったかも……でも全然  
見えなかった～」

「タイヤの下で潰れる感じ、あれすごくないで  
すか？なんか……“今潰したな”って手応えある  
んですよね（笑）」

無意識な“言葉責め”は続いていた。

声色はあくまで明るく、あどけなくさえある。  
けれどその言葉の一つ一つが、直哉の欲望をさ  
らに深く深く掘り下げていく。

(もう……ヤバい……マジで出そう……)

美香の笑顔。

パンプスの足。

濡れた路面に飛び散るカエルの残骸と、そこを疾走する軽自動車。

あらゆるものが、直哉の中で支配・倒錯・興奮の象徴として結びついていた。

そして、ようやく——車が減速を始める。

遠くに見えてきたのは、今日案内されるはずの物件。

「着きましたよ～♪」

ブレーキが優しく踏まれ、車が停止する。  
その瞬間、直哉はようやく息を吐いた。  
だが、それも束の間だった。

助手席のドアを開け、車外に出る。  
雨上がりの湿った空気が肌にまとわりつく。

ふと——何気なく、車の前方に目をやると。

そこには、おびただしい数のカエルの残骸。

フロントのフェンダー、泥除け、バンパーの裏。  
そしてタイヤの溝。

潰れた体液が薄く広がり、千切れた手足が泥と  
一体になってこびり付いていた。

赤黒い塊が点々と……否、帯状に続いている。



そこだけ、車が“何かをしてきた痕跡”として、あまりにも濃く主張していた。

(やばい……)

その一言しか、もう出てこなかった。  
視界がにじみ、耳鳴りがするほどの興奮。

今見ているこの“結果”が、さっきまで運転席にいたこの可愛い女性によって作られたという現実が——あまりにも刺激的すぎた。

「行きますよ～！」

明るい声が背後から響く。  
もうすっかり営業モードの美香は、バッグを肩にかけてヒールの音を軽快に響かせながら、物件の玄関へと向かっていく。

(マジで、限界だ……)

直哉は、もはや一步踏み出すのすら危うい足取りで、美香のあとを追うように、重く、興奮に引きずられながら歩き出した。

玄関に入った美香は、いつも通り自然な動きでパンプスに手をかけた。

ヒールを軽く引っかけて脱ぐ仕草——  
それは何の特別な事もない、ただの“日常の所作”のはずなのに。

直哉にとっては、すでに呼吸すら忘れるほどの光景だった。

スラリと伸びた脚に、薄いベージュのストッキ

ング。

その内側に熱を閉じ込めたままの足が、  
ゆっくりと、湿ったパンプスの中から抜け出していく。

かかとが外れ、土踏まずが浮き、つま先が最後にパンプスから滑り出た。

その瞬間、パンプスの中敷があらわになった。

汗染みで黒く濡れた内部。

奥に行くほどストッキング越しの汗を何度も吸った痕跡で濃い黒に変色していた。

そして——先端のつま先部分には濃く踏み締められた指の跡。

仕事中美香の足指から染み出た汗と垢が、

日々蓄積されてきた証拠。

(……絶対……嗅ぐ……)

その瞬間、直哉の中で何かが“決定”された。  
もう迷いはない。

どこかのタイミングで、必ずあのパンプスの匂いを嗅ぐ――。

美香は、脱いだパンプスを玄関に揃えと、スリッパに足を滑り込ませて「じゃあ、リビングからご案内しますね」と微笑んだ。

ストッキング越しにうっすら光る足のライン。  
汗ばんだスリッパの中で、その足がまだ熱を帯びていることが想像できた。

直哉は、美香の足音を追うように、すぐ背後を歩き出す。

視線は無意識に、美香のスリッパから覗くかかとと足首に吸い寄せられ続ける。

彼女が案内する部屋の間取りや設備の説明は、もう何一つ耳に入ってこなかった。

直哉の中で鳴っているのは、鼓動の音と、パンプスの残像、そして匂いへの渴望だけだった。

（チャンスを……逃すな……）

直哉は、獲物を狙う獣のように、美香が一瞬でも目を離す瞬間——その一瞬を、じつくりと、今、探している。

「ここが和室です～」

玄関から一番奥の部屋に、美香が嬉しそうに案内する。

「この物件、和室あるんですよ？今時珍しくないですか？私、こういうの落ち着くから好きなんですよね～」

そう言って、ほんの少し目を細めて笑う。

その笑顔があまりにも無垢で、無邪気で——  
さっきまで無数のカエルを躊躇なく轢き潰していた人間と、同一人物とは思えないほどだった。

二人はスリッパを脱ぎ、和室に上がる。

直哉は、置かれたスリッパの中に美香の熱がまだ残っているのではと妄想しながら、心の奥でふつつつと煮え立つ興奮を必死に押さえ込んでいた。

「この収納、意外と奥行きあるんですよ」

美香はそう言って、畳の部屋の隅にある襖を軽く開けた。

開いた襖の中は少し暗く、奥の方まで見えづらい。

「あれ……？あれなんだろう……？」

美香がそう呟きながら、屈み込む。  
そして――

四つん這いになり、上半身を襖の奥に潜り込ませた。

その瞬間、直哉の時間が止まった。

襖の外。

投げ出されたストッキング越しの無防備な足裏。

膝をつき、腰を浮かせる姿勢。  
やや斜めに突き出された片足。

その足の裏が、襖の縁越しにこちらへ向けられていた。

指先のラインはくっきりと浮かび、つま先部分はわずかに黒ずんでいた。



汗でうっすらと濡れて光っているようにも見える。

そこから匂いの“気配”が漂ってきそうな錯覚に襲われる。

パンプスの中で蒸れた、美香の足——  
その裏側の中心部が、今、すぐ目の前にある。

(……ああ……もう……無理だ……)

直哉の中で、最後の理性が音を立てて崩れた。

指先が震える。

口の中が乾く。

目の前で広がる倒錯と快楽の象徴。

その匂いを、この距離で、嗅がずにいられるわけがない。

直哉は、気づけば膝をついていた。  
無意識のうちにしゃがみ込み、目の前に突き出された美香の足へ、自然と顔を近づけていく。

襖の中では、美香が小さく唸りながら何かを手探りしている。

その腰は浮かされ、片足が少し後ろへ投げ出される形になっていた。

視線の先には、ストッキング越しの足裏。  
薄く湿ったベージュのナイロン越しに透ける指の輪郭。

つま先の内側にはうっすらと汗染みが浮かび、その匂いが——幻のように鼻先をかすめる気

がした。

(……我慢できない……)

鼻が触れないよう慎重に角度を調整しながら、  
ゆっくりとつま先の辺りへ顔を近づける。

ストッキングの布地越しに、皮膚の微細な凹凸  
や汗の滲みまで見て取れるほどの距離。

——そして、そっと、静かに息を吸い込んだ。

その瞬間——

……っ！！

鼻腔に押し寄せる、濃密な女の匂い。

ツンツとするような湿気を含んだ酸味。

長時間パンプスに閉じ込められていた足から  
発せられる、蒸れた足の臭気が一気に喉奥まで  
突き刺さった。

(くっ……やば……っ)

目の奥がぐらりと揺れる。  
足の匂い——それもただの足ではない。

この足でアクセルを踏み、無数のカエルを轢き  
潰した元凶の足。

(……ああ……)

脳が焼けるような快感と倒錯が混ざり合い、呼

吸が浅くなる。

頭をクラクラさせながら、再び深く、息を吸う。

クン……クン……

酸っぱさと湿気、そしてストッキング越しの汗の生臭さ。

その奥に、かすかに香る甘い柔軟剤のような香りが、狂気の中に一縷の“女らしさ”を加える。

（可愛い村瀬さんの足が……こんなに、くさいなんて……）

そのギャップが、直哉の理性を完全に破壊した。

足裏に当たらないギリギリの距離まで鼻を近づける。

（もっと……もっと嗅ぎたい……！）

そんな本能に突き動かされるまま、鼻をやや深く足の指先の間へ近づけた——その瞬間だった。

「キャッ！？」

美香の高い声が響く。

襖の奥でバランスを崩した美香の体がぐらつき、思わず足を投げ出す。

その足先が勢いよく直哉の顔面に——バチン！とぶつかった。

「ぶッ……！」

激しい衝撃と共に、直哉の頭が軽く跳ねた。

反射的に顔をそむけた直哉は、蹴られた鼻を押さえながらよろける。

「え……？ えっ……高橋さん……？」

振り返る美香の顔には、驚きと戸惑い、そしてどこか不安そうな色が浮かんでいた。

だがその視線は、直哉の異常な姿勢と——何かを蹴ったような自分の足の感覚にゆっくりと

気づき始めていた。

空気が、一瞬、凍りついたように静まる。

「えっ、え……？高橋さん、大丈夫ですかっ！？」

襖の中から慌てて出てきた美香が、目を丸くして駆け寄ってくる。

「え、もしかして……私、高橋さんの顔……蹴っちゃいました……！？」

その声には、心から動揺した様子がにじんでいた。

しゃがみ込んだまま、オロオロと手を伸ばしな



がら、心配そうに覗き込む。

「ご、ごめんなさいっ……！全然気づかなくて、バランス崩しちゃって……！」

直哉は、鼻を押さえながら、痛みと衝撃でぼんやりする頭をなんとか切り替える。

「いえ……全然、大丈夫です。たまたま覗き込んだタイミングだったんで、僕の方こそすみません。」

苦笑まじりにそう答えると、美香の表情がほんの少し和らいだ。

「……そうですか……。ホントびっくりしまし

た〜……」

そう言いながら、美香は膝に手をついて深く息を吐く。

そして一拍置いて、どこか冗談ぽく、けれど少し照れ隠しの混じったような声色で言った。

「……でも……私、高橋さんの鼻蹴っちゃいましたよね？……申し訳ないです〜」

「……今日ずっとパンプス履いてたんで……足、匂ってたら本当ごめんなさい……」

…………っ！！

——その瞬間だった。

直哉の中で、さっきまで薄れかけていた興奮が一気に炎のように再燃した。

(……っ……自分で……今……)

(自分で、足の匂いのこと言った……)

さっきまでバレないように必死に嗅いでいた、蒸れたストッキング越しのつま先。

そこから感じたあの濃厚な、酸味と汗の匂い。

その“正体”を——本人の口から「臭いかもしれない」と言われた瞬間、直哉の中で理性のダムが再び決壊する。

(ヤバい……ヤバいヤバいヤバい……！)

何でもないような口調で、美香は笑っていた。  
だがその言葉の破壊力は凄まじかった。

その一言で——

さっきまで鼻先で嗅いでいた“あの匂い”が、脳  
内で強烈に蘇る。

強烈な酸味、ストッキング越しの湿気、  
そこに微かに混じる柔軟剤のような甘い香り  
と体温の熱——

(それを……自分で……「匂ったらごめんなさい」って……)

——ズン。

下腹部に走る、鋭い疼き。

股間が明確に反応し、ズボンの下からぐっと持ち上げるように膨らむ。

車内ではカバンで隠せていたはずの下半身。

だが今、この状況では隠しきれない。

（くそっ……今……このタイミングで……っ）

急いで体勢を立て直そうとするも、下半身の膨張が邪魔をする。

太ももの内側が突っ張り、下着に包まれた中心がズボンの内側で疼きながら暴れている。

目の前では、美香がまだ申し訳なさそうに笑っている。

けれど、その笑顔の奥にあった言葉——

「足、匂ってたらごめんなさい」

その一言が、直哉にとってはこの言葉がたまらなかった。

興奮の熱が全身に回り、呼吸が荒くなるのを直哉はなんとか抑え込む。

「い、いや……本当に、大丈夫ですから……全然気にしないでください……」

平静を装い気丈にふるまう。

美香は少しホッとしたように微笑みながら立ち上がった。

「そっか、良かった～。もう、気をつけますね、ほんと。」

美香にも「自分の足が匂うかもしれない」という自覚が、確かにあった。

その言葉を彼女自身の口から聞いたことが、直哉の倒錯を一層深く染めていく。

(ああ……この人、無自覚すぎる……)

(無自覚でこんなにも残酷で、優しくて……そして、エロすぎる……)

——直哉の股間の膨らみは、再びピークへと向かっていた。

もう、隠すものもなかった。

いくら脚を組み替えても——  
直哉の股間は、ありありと自己主張していた。

そして、その“異変”は……ついに美香にも伝わってしまった。

(……あれ……?)



美香の視線が、ふと直哉の腿のあたりで止まる。

(……おっきく……なってる……?)

一瞬、自分の目を疑った。

“そんなはずない”と打ち消そうとしたが——  
確かにそこは、不自然に盛り上がっていた。

張ったズボンの生地。座り込んだ状態で突き上げられるように形作られた膨らみ。

視線を逸らそうとしても、気になって仕方がない。

(え……なんで……?)

心の中で、美香の思考が揺らぐ。

(さっき……私、足で蹴ったけど……?)

(……え?まさか、それで興奮……?)

(そんなわけ、ないよね……?でも……)

自分の足が当たった直後から、彼の様子が少しおかしかったのは確かだ。

鼻を押さえながら顔を赤らめて、視線が泳いでいて――

(……もしかして、本当に……?)

美香の心に、ざわりとした違和感と、なぜかほんの少しの“戸惑い混じりの好奇心”が芽生え始

めていた。

一方の直哉も——

その視線と空気の変化を、鋭く感じ取っていた。

(……やばい……絶対バレた……！)

美香の目が、自分の股間を一瞬見た。

そして、その顔が軽く強張った気がした。

直哉は慌てて引き攣った笑顔を作り、無理やり  
愛想笑いを浮かべる。

しかし、どんなに取り繕おうと——もう完全に  
気づかれている。

けれど美香もまた、どう反応するべきか分から

ないような顔で、

直哉の目を見て、わずかに笑みを浮かべた。

——重たい沈黙。

けれど、その沈黙を破ったのは、美香の方だった。

「あの……」

少しだけ声が小さく、でもどこか柔らかいトーンで。

「高橋さんって……私よりお若いみたいだし……なんか、元気……なんですね～(笑)」

その言葉には、驚きと戸惑いと、そしてほんの

少しの“茶化し”が混ざっていた。

直哉は、一瞬、何かを言い返そうとしたが——  
声が出なかった。

すると、美香はほんのり笑いながら続ける。

「えっと……その、全然大丈夫ですからね？私  
……そういうの、割と平気な方なんで」

「だから……あんまり気にしないで、大丈夫で  
すよ？」

そのフォローの言葉は、たしかに“優しさ”だった。

けれどその奥には、

——（あなたが私の足で興奮してるってこと、もう分かってます）

と言われたような気がして、直哉の耳が、真っ赤になる。

「あ、え……はい……その……」

バレた。

完全に——バレてしまった。

直哉は真っ赤になった顔を伏せたまま、何かを言おうと口を開いては、喉の奥で言葉を詰まらせた。

「あの……い、いや……ちが……」

恥ずかしさでうまく声が出ない。  
膝の上で手が落ち着きなく揺れ、視線は定まらない。

そのあまりにも分かりやすい動揺に、目の前の  
美香は思わず口元を緩めた。

「ふふっ……」

目の前の年下男性の、どうしようもなく不器用  
な反応が、どこかくすぐったくて、愛おしいよ  
うにすら見えた。

だから、美香はあえて——少しだけ、意地悪な  
冗談を続けた。

「なんで興奮しちゃったんですか？」

屈むようにして、目を細める。

「……もしかして……私が顔、蹴っちゃったからとか？（笑）」

わざと少し大げさに言って、冗談っぽく笑う。

「そんな訳ないですよねー？（笑）」

——けれど。

返ってくると思っていた、「いや、違いますよー」の否定は——無かった。



「……………」

直哉は、口元にひきつった笑顔を浮かべたまま、何も言わなかった。

いや、言えなかった。

美香の冗談が——遠からず当たっていたからだった。

その反応に、美香の目が一瞬だけ、わずかに揺れた。

(……え……？本当に……？)

冗談のつもりだった。

軽く茶化して、笑って流れると思っていた。

だけど、彼のその顔——

赤く火照った頬。視線の泳ぎ方。肩の強張り。  
そして、さっきからずっとズボン越しに主張し  
続ける“膨らみ”。

(……うそ……本当に……？)

美香の心の中で、驚きと戸惑い、そして——ほ  
んの少しの“イタズラ心”が疼いた。

だから、彼女はさらにもう一步、踏み込んだ。

「……もし、高橋さんが本当に私に興奮してた  
なら——」

声色はあくまで冗談めいて。

けれど、その言葉の裏には、微かな“本気の探り”があった。

「この部屋……契約してくれたら……」

笑顔のまま、ほんの少しだけ首を傾げる。

「……また顔蹴ってあげても良いですよ？…  
…なんちゃって(笑)」

一瞬の沈黙。

けれど、その言葉は——直哉の心を、一気に撃ち抜いた。

軽蔑されなかった。

引かれなかった。

むしろ、冗談でも“受け入れてくれた”。

その事実が、直哉の胸の奥をじんわりと熱くした。

これまで溜め続けてきた欲望と妄想が、ついにその出口を見つけてしまった。

だから——直哉は、もう止められなかった。

唇をわずかに震わせながら、喉の奥から押し出すように、言葉を紡いだ。

「……本当……ですか……？」

声が、かすれていた。  
けれど、確かに届いていた。

そして、次の瞬間。

直哉は——ついに言ってしまった。

「じゃあ……その……契約したら……」

「村瀬さんの足の匂い……嗅がせてもらえませんか……？」

その一言が、部屋の空気をピリッと張り詰めさせた。

冗談では済まされないライン。

倒錯と欲望が、明確な“言葉”として、彼女に突

きつけられた。

——美香は、数秒間、黙ったまま直哉を見つめた。

笑顔でも怒りでもない、その表情。

その瞳の奥で、何かが変わろうとしていた。

「……え、足の匂い……？」

美香の声が、わずかに震えていた。

思わず聞き返すような口調。

けれど、その目は直哉の目を離さなかった。

「それって……本気ですか……？」

冗談のはずだった。

茶化すつもりだった。

なのに——返ってきたのは、冗談では済まないほどの“熱”だった。

直哉は、顔を伏せるようにして、小さく……でもはっきりと頷いた。

「……はい……」

その声に、嘘はなかった。

ごまかしも、照れ隠しも、笑いもない。

ただ、自分の“本心”を曝け出すような、静かな頷き。

それを見た瞬間——  
美香は、すべてを悟った。

(……あ……この人……本当に……)

「高橋さんって……そういうの、好きだったんですか……」

自分でも気づかぬうちに、声が少し低くなっていた。

「じゃあ……さっき“おっきくなってた”のって——」

言葉を一度切り、軽く息を吸い込む。



「……私が顔、蹴っちゃったとき……匂い、嗅いだから……ですか？」

その問いに——直哉は顔を赤らめながら、ほんの少しだけ頷いた。

「……はい……実は……」

言葉を選ぶように、喉が上下する。

「村瀬さんが……襖に潜ってる時……投げ出された足見てたら我慢できなくて……」

「こっそり……匂い、嗅いでした……」

「……すみません……」

その言葉と共に、直哉は肩を落とし、まるで“罪を告白する子供”のように小さくなった。

けれど、そこには“後悔”ではなく、欲望と羞恥と快楽が縋い交ぜになった、墮落の表情があった。

その様子を見て、美香の中で何かがカチリと音を立てて変わっていく。

「……高橋さんって……」

目を細める。

唇の端に、うっすらと笑みが浮かぶ。

「……変態なんですね。」

その言葉には、怒りも拒絶もなかった。

あるのは——“理解”と、静かな優越感。

それは、年上の女が年下の男の“性癖”を見透かし、そこに一步踏み入れた瞬間の、支配者の微笑だった。

「いつからですか？」

すっと声のトーンが落ちる。

「私を、そういう目で見はじめたのって——」

——直哉の喉が、ごくりと鳴る。

もう逃げられなかった。

この流れを止めることも、嘘で誤魔化すこともできない。

そして彼は、すべてを正直に語り始めた。

「……はじめは……最初に会ったとき……」

「村瀬さんが……事務所で出迎えてくれた瞬間から……」

「足元を見て……なんか良いなって、色っぽいなって思っていました……」

「そのあと、車に乗って……あの畦道で、たくさんのカエルを轢きながら——」

「何も気にせず、綺麗な脚でアクセルを踏む姿を見て……」

「……気づいたら……興奮してて……」

「帰り道、村瀬さんに轢かれたカエルをもう一度見たくなって……」

「気づいたら……戻って……その跡を、一匹ずつ見て回って……」

「可愛い村瀬さんがこんな残酷なことをするんだって思ったら興奮が止まらなくて……」

「……完全に……ハマってました……」

言いながら、顔がどんどん赤くなっていく。

「……それから、村瀬さんが履いてるパンプスの匂いも……どうしても嗅ぎたくなって……」

「この前の内見の時……村瀬さんが給湯器の設定してるほんの少しの隙に……」

「玄関でこっそり、嗅いでしまいました……」

「……最低ですよ、俺……」

そう言って下を向いた直哉の言葉の終わりは、震えていた。

けれど、美香は——その様子を、じっと静かに見つめていた。

何も言わずに、ただその告白をすべて受け止めていた。

そして次の瞬間——

彼女の口元に浮かんだ表情は、これまでと少しだけ違っていた。

“女の顔”でも、  
“営業スマイル”でもない。

それは——男の欲望を、完全に掌握しはじめた”  
支配する側”としての笑み。

その唇が、ゆっくりと、意味深に開かれようと  
していた——。

「……そんなことまでしてたんですね……」

ぽつりと、落ち着いたトーンで美香が言った。  
その声に、驚きや戸惑い、そしてほんの少しの  
呆れが混ざっている。

「高橋さんって……ほんっとうに変態なんです  
ね……」

笑ってはいる。

けれど、その目は真剣だった。

まるで“直哉という人間の本性”を、今まさに理解していくような目だった。

「ちょっと……ビククリしちゃいました」

直哉は何も言えなかった。

ただ肩をすくめるようにしながら、小さく俯くだけだった。

しかし美香は、追撃のように、言葉を重ねる。

「……私のパンプスの匂いまで嗅いでたなんて……」

視線が、玄関に置かれた自分の靴へ一瞬向けら



れる。

そして、再び直哉の顔を見つめながら——

「……で、どんな匂い、しましたか？」

「……興奮しましたか？」

——その瞬間、直哉の喉がゴクリと鳴った。

一気に血の気が下がったかと思えば、次の瞬間には逆に顔が一気に熱くなる。

(い、今……なんて……)

真正面から——

彼女は、聞いてきた。

パンプスの匂いがどうだったのか。  
それで本当に興奮したのか。

直哉はもう、取り繕うこともできなかった。

「……はい……」

かすれた声で、でもはっきりと頷く。

「酸っぱくて……蒸れてて……革とストッキングの汗が混ざったような……仕事頑張ったんだなっていうのが伝わるような……」

「……すごく濃くて……思い出しただけでも……たまらなくなります……」

その言葉を口にしながら、直哉の下腹部が明確

に反応していく。

ズボンの下で、股間が硬く膨らみ——

否応なく布地を持ち上げて、形として主張しはじめる。

その様子に、美香の目がピクリと揺れた。

視線が、ごく自然にそこへ向かう。

——目の前の男が、自分の靴の匂いの話をしながら、明らかに勃起している。

その事実が、彼女の中の“スイッチ”を静かに押した。

「……本当に……好きなんですね」

まるで呟くように、感情を確かめるように口にする。

「ふふ……ちょっと、軽蔑しちゃいました」

でも、声には笑みがあつた。  
怒りでも、拒絶でもない。

むしろ、その“倒錯”を受け止め、包み込むような、年上の女の余裕。

「でも……」

一拍置いて、美香は姿勢を正し、直哉の目をしっかりと見据えた。

「そこまで私に……興奮してくれてたなら—

—」

「……いいですよ」

「私も今月……ちょっとノルマが厳しくて」

少しだけ、営業としての顔に戻る。

「だから……この物件、契約してくれるなら——」

「高橋さんに、好きなだけ“私の足の匂い”嗅がせてあげてもいいですよ……？」

## 【この先の展開】

- 契約を条件に美香に足の匂いを嗅がせてもらえることになった直哉。抑えきれない欲望がついに美香へと向かう。
- 表面上は軽蔑しつつも、年上のお姉さんの余裕を見せながらじっくと言葉と足で直哉を弄ぶ美香。
- 美香の足の匂いエピソードや、カエルを轢く時の本音を聞かされながらの足責めに頭がおかしくなりそうな程興奮し、限界を迎える直哉。
- 後日、直哉の性癖を全て知った上での美香からのさらなるアプローチに理性が吹き飛ぶ直哉 etc…。

ついに美香に全てを打ち明けた直哉。

ここからはじまる怒涛の足責め、さらなるクラッシュ展開で目が離せない後半はこだわりのフェチ描写挿絵盛りだくさんの製品版で！